第二言語話者の語りをいかに分析するか

ー母語での語りとの比較を通してー

李址遠(大阪教育大学)

1. はじめに

近年，社会言語学や第二言語教育研究をはじめとする応用言語学の分野では，第二言語学習者の語りや移民の語りなど，母語以外の言語（以下，L2）で語られた語りを分析対象とする研究が増えてきている．そんな中，多くの研究は内容分析（thematic analyses）の方法を採用し，語りの「内容」を分析することによって，語り手の「現実」を捉えることを目指している．しかし，これまでの研究では，語る言語が語りに及ぼし得る影響についての検討はほとんどなされてこなかった（Mann, 2011）．この問題は，内容分析を採用する語りの研究では特に重要な意味を持つ．そこでは，語りの言及指示的な内容と，語り手の経験，意識，認識，感情等を同一視することが前提となるのだが，そのような前提に基づけば，母語（L1）に比べて運用能力の低いL2による語りは，分析データとしての（すなわち，現実の忠実な表象としての）信頼性に不安を残すものになるからである．

本研究では，一人の初中級レベルの日本語学習者を対象にした縦断的インタビューから得られた，同一の経験を題材とした日本語（L2）と英語（L1）によるナラティブを比較・分析する．語りの内容に注目して両者の異同を明らかにしつつ，相違をもたらす要因について考察する．そのことにより，内容分析の限界を指摘し，L2による語りを適切に分析するための観点を示すとともに，語る言語と語りの生成の間の関係を考えるための材料の一つとするのが本研究の目的である．

2. 先行研究

2.1 語りの研究における内容分析への偏重とその限界

ナラティブを分析対象とした近年の研究は，(1)（語る行為ではなく）テクストとしての語りに注目し，(2)（構造や機能ではなく）内容を分析することによって，(3)（ナラティブそのものではなく）語り手の経験，意識，認識等を明らかにするアプローチに偏重している．語りの内容分析に対しては，これまで数々の限界が指摘されてきたが（Briggs,1986; Pavlenko,2007など），それにも関わらず，内容分析への偏りという状況は未だに続いている．ナラティブが語り手と聞き手の間の共同構築（co-construction）を通して生成されることや，ナラティブの社会的・文化的・歴史的な性質を強調した，社会言語学的な視座に基づく諸研究（De Fina & Georgakopoulou,2012;Wortham,2001など）は，内容分析が，言語の機能を言及指示的な側面のみから捉え，発話を個人の内面や外的世界の直接的な反映とみなす歪んだ見方（＝言語イデオロギー）に基づくものであることを示唆している．

2.2 ナラティブにおける語る「言語」という問題

語る言語とナラティブの間の関係という問題は，言語相対性の議論における機能的相対性，すなわち，（相互）行為における言語的手段の機能的形状や，それによって指標されるコンテクストの多様性に由来する相対性（Lucy, 1992）に関わるものである．文化間・言語間のナラティブの比較を行った過去の研究では，言語や文化によってナラティブの構成や展開，語り手の視点に違いが見られることが指摘されている（Pavlenko,2007）．ただし，その一方で，同一の語り手によるL1とL2でのナラティブを比較した研究は少数に限られている．そこでは，L1とL2とで語りの内容や感情に違いが見られることや（Ervin-Tripp,1964），語り手のアイデンティティや語り手の視点の取り方，語りにおける登場人物の表象のあり方に違いが生じ得ること（Koven,1998,2002）が示されている．しかし，同一の語り手による，運用能力に差のあるL1とL2でのナラティブを比較した研究は，管見の及ぶ限りこれまでにない．

3. 調査とデータ

本研究では，日本語学習者A（男性，29歳）を対象にしたインタビューから得られた日本語と英語による二つのナラティブを比較・分析する．調査は日本語の学習に伴う語りの変化を追うという目的で実施されたもので，2020年6月～2021

年11月の間，計16回オンライン（Zoom）で行われた．調査は緩い半構造化インタビューの形式で始まったが，次第に自由会話のようなものに変わり，結果的に多岐にわたる話題の語りが収集されている（約22時間分，録音・録画済み）．インタビューの言語は1〜15回目は日本語で，日本語での語りとの比較のために，16回目のみ英語で実施している．

以下で取り上げるのは，Aが過去の職場で経験した火災の経験について語った，2回目（日本語，2020年7月）と16回目（英語，2021年11月）のインタビューにおける語りである．分析では，二つの抜粋に見られる出来事の表象の違いに注目し，その違いを生じさせる要因について考察した．Labov（1972）のナラティブ・モデルを参照しつつ，フレームの概念（Goffman,1974）を援用して分析を行った．

4. 分析

2回目のインタビューでは，仕事を辞めた理由を聞く筆者の質問をきっかけに，火災に関するナラティブが語られていた．[1]

【抜粋①】日本語（2回目）

01筆：Titaniumの仕事はなぜ辞めたんですか.	23筆：んん．あ::.
02A：えっと:,あ::,課長:,かちょ-部長? 社長? 社長は,ちょっ,と:,	24A：え，例えば:，ある日:，ある日? ん::，はい．ある- ある日，私は:: えっと，きっかい((機械))を，あ: 掃除していました．でも:きっかいは，ちょっ:と悪い- 悪かったと思いました．え，例えば:，多分火事を，火事? 火事を，始:まると思いました．
03筆：うん.	25筆：んんん.
04A：あ::，ん，きち- 気狂い?	26A：私は，えっと:「社長，ちょっと::ちょっと悪いですね:」と言いました．でも社長は((顔を顰め，右手を前後に振りながら))「大丈夫ですよ，早く早く!」
05筆：気狂い?@	27筆：@@
06A：う:ん，はい．@@はい.	28A：でも，そのあと，あ::，何? 日本語で炎? 炎? を，あ::しました.
((中略))	29筆：あああ.
14A：ん: えっと:，はい．社長は，えっと:: うん．この仕事は，危ないです，けど:，あ:: えっと，「早く:@@働いた方がいいですよ?」と言い-よく言いました.	30A：((両手を高く上げて))大きい@炎ですよ@((笑いを止め,目線を右上に向けながら))はい．とっても怖かったです．((笑顔になる))ん:,私の人生?は,もうすぐ,終わりま-終わる:と思いました.@
15筆：危ないけど?	31筆：@@@でも，大丈夫だった?
16A：はい．危ないなのに,	32A：@大丈夫で:す．でも，多分，今，私は今天国にいますね?
17筆：危ないから?	
18A：hmhm，その仕事はと:っても危なかったですよ.	
19筆：うん.	
20A：でも，あ:: 社長は，気にしなかったです.	
21筆：んんん.	
22A：みんなの安全? について.	

社長を非難するAの発話（02,04）は，なぜ仕事を辞めたかという筆者の質問（01）に対する答えとして提示されたものである．火災に関する（狭義の）ナラティブ（Labov,1972）が始まるのは24からで，その構成は「〈方向づけOrientation〉（24）―〈複雑化する行為Complicating Action〉（24,26,28）―〈結果／解決Result / Resolution〉（30）―〈終結Coda〉（32）」となっている．

ここで火災のナラティブは，なぜチタンの仕事を辞めたかという筆者の質問に対する答えの一部として提示されている（24の「例えば」に注目）．Aは仕事を続行させる社長の発話（26）の直後に火災の発生という出来事（28）を配置することで，社長を火災の原因として提示している．Aはこのナラティブを語ることによって，自身が社長を「気狂い」と呼ぶことを正当化し，会社を辞めた理由が社長にあることを説明している．すなわち，ここでAは，インタビュアーの質問に答えるというインタビュイーとしての役割に従事しているのであり，このナラティブは，「質問―答え」の連鎖からなるインタビューのフレーム（Goffman,1974）によって組織化されていると言える．

一方，このナラティブは同時に，死の危機という経験の報告価値（tellability）の伝達を強調するものともなっている．〈評価Evaluation〉（Labov, 1972）としての性格が強く見られる30では，炎の大きさを表す類像的（iconic）なジェスチャーと共に，「大きな炎ですよ」という非過去形の発話がなされ，臨場感を伴った形で事態が描写されている．一方，語りの全体を通して見られる笑いや，32の冗談からも窺えるように，このナラティブは死の危機という経験を，明るく，ユーモラスに伝えるものともなっている．まとめると，①のナラティブは，(1)社長が「気狂い」であることを主張し，

[1] トランスクリプトに使用する記号は次の通りである．

下線	注目すべき箇所	:	直前の音の引き伸ばし	-	言い直し
,	短い間合い	.	下降調の文末イントネーション	?	質問の上昇調イントネーション
!	語気を強めた強調	@	笑い	(2.5)	2.5秒の沈黙
(( ))	筆者による補足	「 」	発話の引用		

なぜ仕事を辞めたかを説明する，(2)死の危機という経験の報告価値を伝える，(3)笑いや冗談によってインタビュアーとの親密さを指標し，インタビューの場を和ませるという機能を同時に果たしていたと言える．

それから約1年5ヶ月後に行われた16回目の英語でのインタビューでは，Aが子供時代，大学時代，仕事，人生に対する考え方の変化などを時間軸に沿って自発的に語る中で，火災の経験に関するナラティブが語られている．

【抜粋②】英語（16回目）

01 A：So, yeah, that- that was cool, um, but it was also very dangerous? It was also very, um, very draining on my personal life? ((中略)) yeah. my boss, at that time, was a complete dickhead. just like the WORST person ever.
((中略))
07 A：And so:, he just wanted to do what was best for him, he didn't care about safety? which is really important? you know, in a titanium plant? And so, he was just the worst, and everyone, because of him everyone left. the company. um, But, yeah, I just remember this one time, I'll tell you a scary story?
08 筆：Uh-huh.
09 A：This one time, we were:, we were assembling this machine? and um, inside the machine, there were these, there were these powders? and metallic powders are very flammable?
10 筆：Uh-huh.
11 A：Especially if there's moisture in the air?
12 筆：Uh-huh.
13 A：And so, um, and also, if you:, if you add a lot of air to metallic powders? they want to catch on fire. They really wanna catch on fire. And so, we were cleaning this, um, a bit of equipment and I was holding this hose? a vacuum, ((機械を持っている仕草)) I was holding a vacuum? And you know, sucking up the material? ((吸引作業をする仕草)) And, you know, we, we sort of, we sort of thought, "ah, this might be a bit, might be a bit dangerous, let's- maybe let's stop here and let's think about it, blah blah blah." And so, carrying this vacuum, down the stairs, and you know, put it on the ground and we sort of walk away a bit, then chatting blah blah blah. And I'm looking at my friend, and I can see in his eyes, it's huge red fire.
14 筆：@@@
15 A：Right? I want you to imagine,
16 筆：@@
17 A：The vacuum? You know how the va- vacuum looks like a cylinder? like this?
18 筆：Uh-huh. Uh-huh.
19 A：And it's got like a hose? The fire, was shooting out of the hose?
20 筆：@@
21 A：Maybe like, (1) 10 meters?
22 筆：@@
23 A：Right? Kha::! ((火が噴き出る仕草)) It's huge fire, and we're all, you know, panicking?
24 筆：@@
25 A：And like, everyone gets like a fire extinguisher and it turns into this big fire? And, I didn't realize, but, as I was, cos I was holding the vacuum, right?
26 筆：Uh-huh.
27 A：That could've gone off in my hand.
28 筆：Uh-huh.
29 A：So, as I was holding it, it could've, you know, exploded in my hand. And I realized, you know, at that time, I was like, "I can't keep doing this job, it's going to get me killed."
30 筆：Uh-huh.
31 A：You know? So, anyway, after that I quit? Um, and, I did another couple of like engineering jobs?

抜粋の冒頭では，仕事の大変さに加え，社長（"boss"）に対する非難が述べられている．ナラティブが始まるのは09からであり，社長に対する非難の直後にナラティブが始まる点は①と共通している．ナラティブの構成は「〈方向づけ〉(09, 11, 13) ―〈複雑化する行為〉(13, 25) ―〈結果／解決〉(29)」となっており，〈終結〉に当たる箇所は存在しない．

①と比較した時まず目につくのは，②に示されるAの語り手としての有能さであろう．描写の繊細さや表現の豊かさはさることながら，その語り口は，聞き手をストーリーの世界に呼び込むような力を持っているようにさえ思える．しかし，このことをもって，L1で語られた②の方が，L2で語られた①に比べて，現実をより忠実に反映していると断定することはできない．というのも，両者の間にはナラティブの内容（＝出来事の表象）に違いが見られるからである．①ではA（「私」）と社長が登場人物となっており，その主な内容は，Aが火災の危険性に気づき，社長にそのことを伝えるが，仕事を続行させられ，火災が発生したというものであった．しかし，②のナラティブでは，言及対象が不明確な"we"（Aと彼の同僚）が用いられており，社長の存在は言及されていない．この違いは，語る言語の違い，または，言語の運用力の差に起因するものではない．上述したように，①のナラティブは，「質問―答え」の連鎖というインタビューのフレームを指標するものであった．このことは，ナラティブの開始直前に位置する「例えば」(24) という言葉に明確に示されており，それは，当のナラティブを社長の性格を示す具体例として位置づけ，社長に対するAの非難を正当化し，会社を辞めた理由を説明するという機能をナラティブに付与するものであったと言える．それに対し，②のナラティブは，"I'll tell you a(n) {adjective} story"という慣習的な言い回しによって枠づけられている．07の"I'll tell you a scary story"は，その直後に続く語りを，"scary"という形容詞が意味する性質を持ったストーリーとして聞くことを聞き手に要求するメタ語用的機能を果たしており，すでに進行中であったインタビューというフレームの中に，ストーリーの披露というパフォーマンスのフレームを創出させ，Aと筆者にそれぞれ，ストーリーを披露するパフォーマーと，そのパフォーマンスを評価するオーディエンスの役割を付与する効果をもたらしている（cf. Bauman & Briggs, 1990）．②のナラティブにおける火災という出来事それ自体への焦点化，そして，社長に対する無関心は，このようなフレームの統制によるものであったと解釈できる．さらに，このように考えると，①と②の間に見られる歴然とした表現力の違いを，単に語る言語（L1

かL2か）に因るものであると断定することはできなくなる．パフォーマンスのフレームを導入した以上，Aには聞き手を満足させられるような，聞くに値するナラティブを披露する必要があったのであり，②に見られる巧みな描写は，（部分的には）そのようなフレームの統制の結果として生まれたものであると言えるからである．なお，ナラティブを「今・ここ」に戻す〈終結〉が②に存在しないことは，そのナラティブが，既に進行中であったインタビューのフレームに挿入された，下位のフレームの下で語られたものであることを裏づけている．

5. 結び

同一の経験を題材にした①と②のナラティブは共に，Aが自身の個人史を語る中で，社長に対する非難の直後という類似した文脈において語られていた．しかし，その各々は異なるフレームの下で組織化されており，そのようなメタ語用的統制の違いが，ナラティブの構造や機能，さらには出来事の表象にまで影響を及ぼしていたと言える．L1で語られた②の方により豊かな表現と繊細な描写が見られるのは事実であるが，そのことは決して，L1のナラティブの方がL2のナラティブに比べて，過去の出来事（＝現実）を忠実に反映していることを意味するわけではない．出来事の表象は，それぞれのナラティブのコンテクストに相応しい形で生み出されているのである．②と比べると見劣りする①における出来事の描写も，仕事を辞めた理由を伝えるためのものとしては十分な役割を果たしていたと言える．

以上のことは，語りの内容分析が有する問題性を強く示唆している．語りは決して現実の忠実な反映ではなく，言語の運用力がその反映の度合いを左右するとも言えない．全ての語りは，そのコンテクストとの関連において分析されるべきであり，語りにおける現実の表象は，語りがコンテクストを指標しながら組織化される過程の中で偶発的に生み出されるものとして理解する必要がある．

一方，本研究では言語の違いに起因すると思われる語りの内容に関する相違は，描写の具体性と繊細さ以外では確認できなかった．しかし，本研究は限られたデータを基にしたものであり，ここでは取り上げられなかったAの他の語りでは，日本語における特定の言い回しが，出来事の表象の仕方に影響している思われる例も見られた．分析範囲を広げながら，語る言語が語りの生成に及ぼし得る影響について考察を深めていくことが今後の課題である．

参考文献

Bauman, R. & Briggs, C. L., (1990). Poetics and performance as critical perspectives on language and social life. *Annual Review of Anthropology*, 19(1), 59-88.

Briggs, C. L. (1986). *Learning how to ask: A sociolinguistic appraisal of the role of the interview in social science research*. Cambridge: Cambridge University Press.

De Fina, A., & Georgakopoulou, A. (2012). *Analyzing narrative: Discourse and sociolinguistic perspectives*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ervin-Tripp, S. (1964). Language and TAT content in bilinguals. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 68(5), 500-507.

Goffman, E. (1974). *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Koven, M. (1998). Two languages in the self/the self in two languages: French-Portuguese bilinguals' verbal enactments and experiences of self in narrative discourse. *Ethos*, 26(4), 410-455.

Koven, M. (2002). An analysis of speaker role inhabitance in narratives of personal experience. *Journal of Pragmatics*, 34, 167-217.

Labov, W. (1972). *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

Lucy, J. A. (1992). *Language diversity and thought: A reformulation of the linguistic relativity hypothesis*. Cambridge: Cambridge University Press.

Mann, S. (2011). A critical review of qualitative interviews in applied linguistics. *Applied Linguistics*, 32(1), 6-24.

Pavlenko, A. (2007). Autobiographic narratives as data in applied linguistics. *Applied Linguistics*, 28(2), 163-188.

Wortham, S. (2001). *Narratives in action: A strategy for research and analysis*. New York: Teachers College Press.